

私の研究



タヌキの幻術と日本人

篠原 拓也 (しのはら たくや)

東日本国際大学 健康福祉学部
准教授



はじめに

私は、学部では福祉社会学、修士課程では法社会学、博士課程では社会福祉学を専門としておりました。論文や学会発表で残したのものとしては、社会福祉理論、児童家庭福祉、人権論、Winnie-the-Pooh（くまのプーさん）研究、戦争研究、タヌキ研究といった具合で、いろいろなことをやってきました。自分でも何をやっているのか不思議に思うばかりで、説明するのが難しいというのが正直なところです。ひとまず、社会福祉学の基礎研究が専門なので、よって立つ基礎研究があれば、テーマは何でもいいとまではいわないにしても、いろいろなことを広く扱えるということにしておいて下さい。

ここでは、抽象的な社会福祉理論を講じても実用性がなくつまらないので、タヌキの幻術とその対策について述べたいと思います。

タヌキの幻術に関する研究とは

タヌキは警戒心が強く、長い歴史の中で人間をよく理解してきたので、人間の前ではほとんど幻術を用いる過程を見せません。そのため、先人が

蓄積してきた文献資料から「幻術」の象を描き、対策を考えることになります。このような研究は直接に生態学に位置づく研究ではありませんし、また直接に動物福祉論に位置づく研究でもありません。その視座は、経験の語りやそれを記録した文献を文化人類学（民俗学）のいうように「あったる、出来事として記録された資料を用いること、現象学のように私たち一人ひとりの経験する「現実」を尊重することの上に成り立つものです。その実際的な意義としては、紛争や暴力の実相を冷静に捉えてそのコントロールを目指す戦争学や平和学の視座に重なるものであり、すなわち人間とタヌキの紛争を回避または処理する技術の発展を目指すことにあります。

日本人にとってタヌキは「よくわからないもの」でした。その語源は不明確で、そこからして「よくわからないもの」であることがわかります。タヌキはイヌ科に属していますが、なんとなくこれに似た動物の名を借りて呼ばれています。ドイツ語ではテン〔marder〕に似ているとして marderhund と呼ばれたり、アライグマ〔Waschbär〕に似ているとして Waschbärhund と呼ばれたりしています。英語でも、アライグマ〔Raccoon〕に似ているとして、Raccoon dog と呼ばれています。学

名の *Nyctereutes procyonoides* は「夜中にものを探すアライグマのようなもの」という意味で、やはり何かに似ている何かです。日本ではタヌキを「狸」と書いて「たぬき」と読みますが、「狸」という漢字の歴史と、「たぬき」という発音の歴史はそれぞれ異なっていて諸説があり、複雑怪奇にして研究者を困らせています。日本の古典文献における「狸」に今のタヌキをそのままあてはめると無理が生じます。例えば「狸」と記されている生物が空を飛んだりするのですが、その場合はムササビを意味している可能性があります。また日本ではタヌキはアナグマと似たようなものという感覚から、「貉」や「貉」という語が使われてきました。いずれにせよ、外国と同様に、似た生きものであるネコやアナグマなどのイメージを借りて現在の「狸（たぬきと発音する）」となった可能性が高く、「よくわからないもの」として、似たようなものを用いて説明するほかないものがタヌキであるといえます。

タヌキは存在自体がよくわからない生きものですので、行動もよくわかっていません。タヌキが幻術を用いて人を化かすことは周知の通りです。現在では歴史学や生態学の観点から、タヌキが幻術を用いることについて、人間がそれを確信するに足る理由を考察する向きもあります。例えば、タヌキが去り際にチラッと振り返る行動の怪しさとか、捕獲されたショックあるいは相手を油断させるためにぐったりとして動かなくなるがいつの間にか逃げ出しているという行動の怪しさ（いわゆるたぬき寝入り）に注目するものです。

当然のことながら、これらは「タヌキが人を化かす」という通説を否定しようとする文脈ではありません。歴史上の人物の思考や行動について地政学ではなく脳科学の立場から説明する学者がいるように、また人間の狂気を医学ではなく社会学の立場から説明する学者がいるように、ある現象を別の言語で説明しているのです。それらは本質論的な真偽の理解に迫っているというよりは、人間社会をより平和で豊かにするさまざまな方法のための一つの現象理解に迫っているのであって、さまざまなアプローチがあるわけです。そもそもタヌキの魅力に憑かれた研究者たちは、児童文学者、化学者、生態学者、民俗学者などが自分の専

門分野や専門テーマがある上で副専攻のような形で追究し、積み上げてきたのであって、タヌキの幻術について徹底的に論証しようというものではありません。

タヌキの幻術の特徴

さて、本題に入りましょう。タヌキの幻術には時代ごとの特徴があるのですが、少なくとも江戸以降の幻術の代表的なものは、視覚的なものではなく聴覚的なものです。そもそもタヌキは日本人にとって「よくわからないもの」ですので、見えなくてよくわからない怪奇音に対して、いろいろ考えてみた結果、タヌキの仕業であると気づくということがよくあります。そもそも、イヌは「ワンワン」、ネコは「ニャーニャー」ですが、なぜかイヌの仲間であるタヌキのイメージは「ポンポコ」です。日本人にとってのタヌキというのは、月夜に遠くから聞こえてくる腹太鼓や狸囃子のよう、鳴き声以外の聴覚現象のイメージのほうがしっくりきます。腹太鼓や狸囃子のほかには、木を切る音、雨の音、藁を打つ音、織り機の音、米をつく音、鐘の音、汽車の音、下駄の音、花火の音、子どもの泣き声、三味線の音、炭坑で函を押す音、人が大勢走って来る音などなど、キリがなく、要するに日本人が生活で経験する音声なら出します。タヌキの怪の一つの典型的現象に「呼ばれる」があります。要するにどこからか呼んでくるのです。これに応答すると呼びかけ合いになって、根負けせずに呼び続けて、最終的に人間が勝ったら近くにタヌキの死体があり、人間が負けたらタヌキに食べられてしまいます。

では幻術のうち、視覚的なものはどうでしょうか。タヌキは人に化けます。キツネは女、タヌキは入道（坊主）というのが典型ですが、そのほかにも女性や旅人など、いろいろな人に化けます。またタヌキ自体が何かに化けるだけでなく、人間に何かしらの幻術をみせることがあります。その代表例が火を出すことです。火の玉、ちょうちんの灯、葬式の火、嫁入りの火、焚火、火事など、火にまつわる記録が多くあります。冠婚葬祭については、人間の真似をしてそういうことをするものと考えられています。無から火などの何かを出

して見せる方式の幻術のほかには、物を何かに変化させて見せるという方式の幻術もあります。

タヌキの幻術の方法は次の(1)から(4)のどれかか、その組み合わせです。




(1) 触れずに火を起こしたり音を出したりするなど、非接触的な方法	
(2) 尻尾を打って轟音とともに木を伐ってみせるなど、接触的な方法	
(3) 入道に化けるなど、タヌキ自体が変化する方法	
(4) 鍬を大男にするなど、何かを変化させる方法	

タヌキの幻術の目的は、人間の真似やいたづらをするもののほか、山の開発への抵抗、人間にいじめられた仕返し、逆に人間に助けられたことへの恩返しが典型です。

なお、タヌキの幻術は何らかのミスで人間に見破られることも少なくありません。例えば火事を見せるときに火は出ても煙が出ない場合や、月がこうこうとしているのに雨の音がする場合、そもそも月が2つ出ている場合、言葉の発音がおかしい場合などがそれです。

タヌキとのコミュニケーション

重要なことは、タヌキは幻術を使うばかりではなく、幻術を使おうと使わなろうと、長らく当然に人間と交流してきたという点です。何かをねだるときには人間の声で呼びかけることもありますし、そもそもタヌキの姿のまま人と会ってコミュニケーションをしている場合もあります。文献によってはどのような状態のタヌキなのかかわからない場合もありますが、いずれにせよ次の①から③のどれかか、その組み合わせです。

① よくわからない存在とのコミュニケーションをタヌキと解釈する場合。	 「あれはタヌキの仕業だった。タヌキは…」
② 初めから、あるいは途中からタヌキとわかってコミュニケーションをとる場合。	 「タヌキが化けて出てきた。タヌキは…」
③ そのままのタヌキとコミュニケーションをとる場合。	 「〇〇というタヌキに会った。あいつは…」

③は意外かもしれませんが、かつての日本人には普通のことだったのでしょう。特に、一部の友好的で秀でたタヌキは人々を助け、頼られてきました。徳島の打上花火の名手、楠藤兵衛がそれです。彼は人に化けることはあまり得意ではなかったのですが、花火の打ち上げが得意なことで有名で、お国のためとって日清戦争と日露戦争にも出征し、得意の花火で日本軍を助けました。ちなみに、戦争に関しては、太平洋戦争のときに迷った日本兵がタヌキの火の玉に案内され助かったという話もあります。

このほか、タヌキが幻術を使ったとわかるもの以外では、タヌキが人に憑いたり、タヌキのままの姿で砂を投げたり石を落としたりしてくる場合があります。

福島県のタヌキ

福島県のタヌキの幻術にまつわる話は、やはり山だらけの会津地方に多くあります。喜多方市ではかつて、月が綺麗な夜に豆柿の木に行くとタヌキの嫁入りを見ることができたようです。人間が肉や魚をもって歩いていると、タヌキと思しきものの仕業で大入道が現れたり、道や空が燃えるように赤く染め上げたりする幻術で驚かされたという話もあります。南会津の伊南村では、天狗の使いのタヌキが太い尻尾で木を打って山から転げ落とすという話があります。恐ろしいことに、タヌキが人間を殺して舌を食べることで人間と同じように「おはようございます」「こんにちは」「こん

ばんは」といった言葉が話せるようになるという話もあります。同じく南会津の檜枝岐村には、のこぎりを挽く音やニワトリの鳴き声、子どもの声などを真似るタヌキの話があります。尾瀬平にはいろいろと芸をしたり人を化かしたりするタヌキがいて、釣り小屋にイワナのはらわたを投げておくとやってきてそれを食べ、笛を吹いたり腹太鼓を叩いたりしましたという話があります（しかしそこに罌をかけて獲ってしまうと、そこでは笛も太鼓も聞けなくなってしまうのです）。三島町にはタヌキの恩返しの話、猪苗代湖周辺ではキツネとタヌキの果し合いの話があります。

中通りの話として、伊達郡国見町には、タヌキと思しきものが、川があるはずもないところで大きな川を見せたり、笠をかぶった体の小さいタヌキが毛の生えた太い脛をつきだして座っていたり、月が人の前にあるのに影を前に出したりしたという話があります。二本松の化けタヌキは結婚式にやってきて大酒を飲んで軒下で寝ています。川俣町には有名なタヌキの金玉八畳敷の話や、タヌキが美しい女性に化けて機織りするという話もあります。壮大な話では、山に二匹の狐がいて、そのうち一匹が村に降りてきて畑を荒らすので、神様がその狐を太らせてタヌキにするという話もあります。当然のように人間がタヌキと会話して知恵比べをする話もあります。浜通りの話として、双葉郡の竜田村（現 双葉郡檜葉町北部）では、タヌキと思しきものの仕業で、道を歩いているつもりが田んぼの中をかき分けていたという話があります。

以上のほかにも、全国にみられる「ずいとん坊」や「かちかち山」などの話があります。ただ、福島県には、管見する限りタヌキにまつわる話はキツネほど多くはなく、あの文福茶釜の話がタヌキではなくキツネになっていることもあります。福島県の人々の生活感覚としては、キツネのほうが意識されているのかもしれない。

おわりに

戦前は獣の毛皮が高値で売れました。毛皮目的のタヌキがロシア経由でヨーロッパに進出し、今日では水鳥を襲うなどして特に中欧・北欧で脅威とされています。しかしタヌキの力はそれだけではありません。西洋人にはまだ知られていないタヌキの底知れぬ力とそれへの対策を語り、共生の方図を示すことは、やはり私たち日本人の役目でしょう。

参考文献

- 遠藤太禪（1982）『奥会津山里民話第1号』三島町文化協会
- 川俣町教育委員会（1985）『川俣の昔ばなし』
- 国見町教育委員会（1990）『続・国見の民話』
- 志村俊司編（1984）『山人の賦Ⅰ — 尾瀬・奥只見の猟師とケモノたち』白日社
- 志村俊司編（1985）『山人の賦Ⅱ — 尾瀬に生きた最後の猟師』白日社
- 志村俊司編（1988）『山人の賦Ⅲ — 檜枝岐・山に生きる』
- 高槻成紀（2016）『タヌキ学入門 — かちかち山から3.11まで 身近な野生動物の意外な素顔』誠文堂新光社
- 天栄村公民館編（1981）『天栄村の民話と伝説』天栄村教育委員会
- 日本民話の会（1983）『民話の手帳〈別冊〉No.17 伊南村の民話』第一法規
- 松谷みよ子（2004）『現代民話考11 — 狸・むじな』筑摩書房
- 民話と文学の会（1979）『会津・山都の民話』
- 橋本武（1975）『猪苗代湖畔の民話 — 湖周辺のいろりばなし』文化書房博文社
- 渡辺武久（1994）『二本松の伝説とむかしばなし』歴史春秋社

<プロフィール>

京都府立大学福祉社会学部卒業。大阪府立大学大学院人間社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程修了（社会福祉学博士）。奈良教育大学特任講師を経て、2019年より現職。

主な著書として、『児童虐待の社会福祉学 — なぜ児童相談所が親子を引き離すのか』（2019年、大学教育出版、単著）、『社会福祉学における人権論』（2020年、大学教育出版、単著）。